

Title	石川博資著 日本産金史
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.11 (1938. 11) ,p.1577(111)- 1581(115)
JaLC DOI	10.14991/001.19381101-0111
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381101-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マックス・ペーア著 『第十三世紀より第十八世紀中葉に至る初期英國經濟學』

一一〇 (一五七六)

昨年は吾人が曩きに紹介せるイー・エー・ジェ・ジョンソン博士の『アダム・スミスの諸先蹤。英國經濟思想の發達の出版せらるゝあり、本年は又此のペーア氏の著の現るゝを見る。英國經濟學前史の研究が輓近頗に盛んなるを賀せざるを得ない。

(四六判二五〇頁、三越洋書部賣價金七圓六十五錢)。

石川博資著「日本産金史」

野村兼太郎

金の重要性が今日ほど強く一般に認められたことはないであらう。従つて「日本産金史」と云ふやうな書名もかなり興味を感じしむる題目であるに違いない。六七年前の黄金狂時代にも増して、金の必要を痛切に感じてゐる今日、かつてマルコ・ポロをして黄金島と誤認させた日本の産金状態がどうであつたかと云ふことは、何人も知らんと欲するところの題材であらう。そのくせこの欲求を満たすに足るやうな書物は從來見當らなかつた。金を社會問題的に取扱つた本は澤山ある。又金を心理學的に見たものもある。しかし日本で金がどうして産出され、どのくらゐ出來、又どんな状態であつたかを明かにした書物はない。殊にその採掘技術を十分に説明したものは見當らない。

かつて黄金花さく陸奥國と云はれた東北地方が經濟的に恵まれてゐないやうに、黄金の國と云はれた日本も金には缺乏してゐた。家康の有名な「山例五十三條」に見られるやうな、徹底的な保護奨励を以つて産金を促がした時でも、——人殺しをやつても金堀師なら許されると云ふほど技師を敬待したのだが——矢張り産金は十分とは云へなかつたやうである。しかも家康時代以後國々の産金は著しく減じた。金に對する欲求は日本人にあつても甚だ強かつた。金は食用にもならず饑饉の際には何にもならぬと論ずる徳川時代の貴穀賤金論者の議論を以つても黄金

の魅力は如何ともし難いものであつた。この方面から日本の歴史を見ることも甚だ面白いことであると思つてゐた。私はさうした幾つかの希望をもちつゝ石川氏の「日本産金史」を繙いた。そして私の希望はある程度の満足を得た。しかしそれはある程度であつた。遺憾ながら何れの點についても十分に満足されたとは云ひ得ない。その書名から云へば第一の點、即ち日本の産金状態及びその技術の變遷について詳述されてゐるものと期待してよい筈である。勿論それ等について書いてはあつた。だが満足すべき程度ではない。

石川氏は金に關する多くの資料を蒐集された。「久しく金に關する資料を蒐めおりしが、いつしか机邊に山積するに至つた」とその序文に記されてゐる。又「古來、産金および精鍊については、大かた口傳、秘録によるもの多く、且つ隠語また夥しく、その研鑽に頗る心を勞せしが、幸にして寫本、古書の傳ふるありて稿を草し、一まづ此處に整理して上梓することゝした」と云はれた如く、その利用せられた諸書にはわれ等未見のものが少なくない。殊に卷頭に原色版を以つて附せられた「金銀山敷内敷岡稼方之圖」の如き最も珍とするに足りるであらう。氏はそれ等の資料に依つてまんべんなく金について記述されんとした。その點は本書の目次を一見すれば直ちに知り得ることである。第一章緒論以下、第三十五章に至る題目を掲げると、金の由來、金の品位、金の生狀、金の砂鑛、金の名目、金の字義、金の異名、金の歌抄、金の文抄、金の古諺、金の隱語、金の歴史、山の法度、山相、土容、廢坑、川礫、草木、金山の特徴、開掘の端緒、採掘の方法、舖内の風情、鑛夫の道徳、土中の邪氣、金山の傳説、金山に働く人々、金山の用具、鍊石の取捌、金銀貨史、金座の沿革、金山の地誌、大久保長安略傳、大仁金山誌、金山俚言の三十四項である。要するに氏は蒐集せられた資料をこれ等の項目に割當てられ、しかもそれ等の資料については何等の検討をも加へられずに引用されたやうである。

例へば手あたり次第にあけて見ると、第五章金の砂鑛のところが出た。砂金のわが國で使用された由來を記し、「神功皇后の三韓親征以來、彼地よりの朝貢船に多量の砂金が積まれて來たことは事實であつたらしく、また奥州で初めて採れた金も、その後間もなく駿河の多胡濱浦で獲たものも共に砂金であつたやうである。後白河法皇が承安三年三月に染草とともに宋國に送つた壹百兩も砂金であり、治承年中に平重盛が嚴島神社に差出した千兩の祈禱料も、奥州の砂金であつた。金が未だ通貨としての形態をそなえるに至るまでは、斯くの如く、砂金のまゝで贈答の資に使はれてゐたのである」と述べられ、その後につゞいて砂金のことの現れてゐる文獻を抄出して引用されてゐる。「白石建議」「下野國誌」「八雲御抄」「續日本後記」「源平盛衰記」「今川大雙紙」「進退記」「榮花物語」「扶桑略記」「金銀圖錄」などからである。これ等の諸書を一々探索されたその勞は多とすべきである。恐らく掲載されたもの以外に、棄てられたものもかなり多かつたらうと想像される。例へば、續日本後記中には擧げられたもの以外に、かなり多くの例がある。承和三年に天皇が入唐大使に對し、「御衣一襲。白絹御被二條。砂金二百兩」。副使には、「御衣一襲。赤絹被二條。砂金百兩」を賜つた例などがその一つである。しかしこれは問題ではない。何人と雖もかうした例をすべて網羅することは不可能に近い。唯かく資料を無批判的に羅列することに不満を感じるのである。資料に對するかう云ふ態度は徳川時代以來學者識者に依つて好んで採られてゐるやうである。博搜して得た資料は割愛しにくいものである。しかし資料を検討することなく、濫りに引用することは効果がない。このことは本書について私の感じた最も大なる不満である。それは今例示したところだけではなく、全篇に亘つてさうである。例へば第十三章金の歴史の如きは私の最も興味多く讀んだ一章であるが、矢張り同様の不満がある。徳川初期の金流出について論ぜられ、有名な鎖國に言及され、その依つてなされた原因を一般にはキリスト教弾壓のためと信じら

れてゐるやうであるが、それと共に金銀の海外奔流といふ由々しき問題が黙視する能はざるほどに進展してゐた裏面を忘れてはならない」と云はれてゐるのは、金を中心として歴史を見てゆく上からそれでよいとしても、金銀流出額については單に白石の「本朝寶貨通用事略」の數字を掲げるのみで、その數字に對し、何等の批判も加へず、何等の疑惑ももたれなかつた、その態度が少なからず物足りない。

技術的方面の記述は第十五章以下數章に亘つて見られるが、この方面では歴史的な敘述は全然ない。主として「鑛夫雜談」と云ふ書物に依つて記されたらしい。山相とか、土容とか云ふ方面のことは主として佐藤信淵、赤穂滿矩の著作に依られてゐる。「鑛夫雜談」と云ふ本は私の未だ一見することを得ない書物である。非常に有用なものと思はれるが、恐らく徳川末期の著作なのではなからうか。兎に角かうした種類のその他多くの著作を参照されつゝ、恐らく徳川末期と思はれる時代の鑛山生活を紹介されてゐるのである。鑛山採掘技術の變遷については全く觸れてゐない。かの大久保長安がポルトガルの切支丹宣教師から傳へられたと云ふ西洋流の採掘技術についても、唯さうした事實があつたと云ふことを云はれるのみで、何等それが證據とすべき資料を提示されてゐるわけではない。又長安以前の技術と長安以後の技術との相違が如何なる點にあつたかを十分に説明されてゐない。葡人渡來以後、急激に増加したわが金産出について、その技術的變遷を知りたいと思つてゐる私にとつては頗る物足りなかつた。

以上私の不満に感じて來た點ばかりを述べて來た。しかし見方を變へて、本書を見れば、好箇の讀物たることを失はぬ。前掲の目次に依つても知り得るやうに、一章一章がそれぞれ獨立の讀物たり得る。文章は流暢である。一種の隨筆體である。その例として第三章金の品位の一節を採らう。

「人類は、はるが太古より黄金の美しさに魅せられてゐたし、また黄金を知るといふ事實に、無上の誇りをすら持

つてゐたのである。概して黄金の發見せられた始めは大河の流れの底、海濱の砂地、あるひは山中の、木石の間などにあつて、吹きわけけるに及ばざる自然金の状態に於てであつたが、何といつても金はその比重の、まことに大なること、その特有のうるはしい光澤および、決して錆びないことなどの爲に、有史以前の、何事にも觀察力の鈍かつた未開時代にあつても、人類は非常なる注意力を、この金屬に吸はれてゐたのであつた。西洋の歴史を讀むと、エデンの花園の記事に、砂金のことが載つており、エジプトの墓穴中より、金の裝飾品が發見されてゐる。」

かうした調子でなだらかに書きつゞけられてゐるので、資料のことなどにこだはらずに讀めば、極めて興味多い書物である。著者の意圖も、(著者が帝國産金興業株式會社の主宰者であるがため、伊豆大仁金山について多少宣傳的な意圖があつたとしても、それは本書にはむしろ遠慮がちに出てゐるに過ぎない)恐らく學術的攻究書と云ふよりも、金に關する歴史的讀物を提供せんとするにあつたのではなからうか。もしさうだとすれば、本書は確かに成功してゐる。誰でも倦まずに全巻を讀み通すことが出来るし、又金に關するいろ／＼な史的知識を豊富に拾ひ出すことが出来るからである。又それが敢てこゝに紹介する所以でもある。唯私としては將來より系統づけられた「日本産金史」の誕生することを期待するが故に、敢て不満を記述した次第である。